美浜町史跡めぐりに参加　　2017.12.10

河和城跡と河和の殿様について

今回はガイドの山本さんの紹介で美浜の歴史散策に参加しました。案内の河和城跡と全忠寺という文字が目に留まり、水野氏との関係なども勉強できると思い、ふるさとガイドのメンバー７人で一緒に参加しました。いただいた資料からいつものように私流に整理しました。

美浜町歴史観光ガイド協会の町内史跡巡りは５０円

美浜町は現在人口 23.000 人で、その歴史は昭和３０年に野間と河和が合併し、その２年後に小鈴谷の一部を編入して現在に至っています。平成１７年には合併して『南セントレア市』をつくろうとしましたが、そのネーミングを含め全国の話題になりました。が、住民の多くは反対して実現しませんでした。私なんかは昔からの『河和』や『野間』の名前の印象が強くて、いまだに美浜というと何となくしっくりきません。その河和出身の有名人は、現在の経団連の榊原会長、漂流した漁師の音吉、日本の山林王と言われた木原豊次郎の名前があげられます。

それはさておき美浜町役場に到着して受付をすると、参加費は５０円で A4 の３枚６ページの資料と小さいペットボトルのお茶をいただきました。私たちはふるさと散歩の参加費を２００円にしようかと検討中ですが、５０円でお茶まで出されると考えさせられてしまいます。開催回数やその他のことを聞くことは出来ませんでしたが、町の補助はなく会費のみで運営しているとすると立派です。聞くことが出来たのは、会員数は１５名ほどということでした。天保 12 年の河和村絵図

旧跡さん

最初に案内されたのは川沿いにあるお墓。河和の岡のわき新江川の近くに、立派な宝篋印塔があり河和城を造った戸田憲光、あるいは三代孫八郎守光の墓ともいわれ、俗に『旧跡さん』と呼ばれています。ここは昔、全忠寺があった場所であり、墓に少しでも失礼なことをすると、罰が当たって病気になると伝えられています。この墓から数百メートル南東に『城山』と呼ばれる河和城跡があります。小雨がしとしとと降る夜には、この墓からちょうちん行列が出て城山の坂道を登っていくのが見られた…という。これは、戸田一族の亡霊がなつかしい城へ帰っていく姿だと言われています。最近の専門家によれば、塔の型式から見ると室町期のもので、初代河和城主戸田憲光のものではないかと考えられているそうです。その**戸田憲光は**父宗光の跡を継ぎ田原戸田家を繁栄安泰に保ちました。1509 年になると嫡男の政光に田原城をゆずり、憲光自身は知多半島の河和城に移り住み 1527 年まで過ごしたと言われています。その憲光のことを『河和殿』と呼んでおり、戸田憲光こそ河和城初代城主と考えられています。

河和城と田原戸田氏

田原戸田氏の全盛期は、戸田憲光の時です。渥美半島を統一し知多半島の一部にも領地を広げ、三河湾はおろか伊勢湾の海上交通まで大きな力を持つようになりました。渥美半島の渥美は安曇からきていると言われています。安曇は北九州に出生地を持つ海の民の一族であり、古くから中国や朝鮮半島とも交易などを通じて関係があったと言われています。

戸田氏は渥美半島に住むこうした海を生活の舞台にして、生き続けてきた人たちの力を味方につけ繁栄をしていきました。これを示す資料に田原城藤田曲輪から出土した大量の陶磁器類があげられ、この中には中国製の元様式の花瓶が含まれています。この花瓶は当時の戦国大名のあこがれの宝物でした。このような物を持つことが出来るのは、戸田氏の海上交通にかかる力を示すものと言えます(この項は田原市教育委員会の資料より)

土塁と横堀で守られた河和城

川沿いの旧跡さんを出て橋を渡るのだが、そこかからお城があったという小さな山が白い建物の後ろに見えます。竹が多いらしく緑色の山は川の流れとともに美しい眺めです。少し歩くと知多厚生病院前の交差点に出る、ここを左折して少し行くと城山を登っていきます。途中、土を取ったという少し広い場所まで行くと、左手に海が広がりとても美しい景色

が飛び込んできました。街が見渡せるだけでなく、足元には新江川が流れておりお城への物資搬入が容易になされる地の利が特徴です。そこから少し登ったところで河和城について説明がありました、河和城は渥美の戸田氏によって造られた戦国時代の城です。したがって天守閣はもちろん、石垣もありません。その特徴は『土塁』や『横堀』で守られていました。ここで大きな手製のビラを使ってかなり詳しく説明してくれました、が、話は次々と展開していくので自分の整理が追いつきません。主郭のあった一番高い所へ上がる階段の途中に陣取って、ビラを取り換え取り換え熱心に説明してくれました。しかし、説明してくれればくれるほど理解が追いつきません。そんな私は、要点を三つにまとめてお話しすることが一番わかりやすいと思っています。

話しの展開は関連する事柄を同時に並行して話をするのではなく、一つの流れだけを主に進めて、それに付随することは後から付け加えると分かりやすいと思います。要は知らない人にもなるべく分かりやすく話すことだと思います。つまり、いろいろあった複雑な歴史を一度の説明ですんなり理解するのはもともと困難です。

説明のあと階段を上って主郭のあった場に向かいましたが、とても急な階段でちょっと危険だと感じました。中高年者を案内するにはロープでも持って登れるようにするべきと思いました。登りきるとかなり広い平らなスペースがありましたが、長く伸びた草が刈り取られて横になっていました。今回のために草刈りをしたそうです。そこには桜の樹も植えられており、昔は手入れもされて花見を楽しんだようです。

ここでお城の説明がありました、4つの曲輪と虎口が2か所土塁に囲まれています。広場を取り巻く周りは竹が生い茂り、その先に土塁がありますがなかなかそこまで容易には進めません。足元も悪く折れた竹や木の枝が邪魔して危険です、でもガイドさんはその中へ押し入って説明しました。が、これはいかがなものか、ケガをしない保証はありませんから。説明熱心なことは良いのですかが、参加者の安全確保がおろそかになってしまうことは避けるべきです。それはさておき、生い茂る竹を処分して展望が確保されたな

ら、景色抜群の史跡として訪れる人も増えることだろうと思いました。

全忠寺は河和城初代城主の戒名から命名された

主郭跡を降りて直の所に城口観音が祭られていました、観音様とは如来になるために修行中の身で、人々を救うためにいろいろな姿に変身します。ここにあるということはお城を守ってもらう願いからでしょうか。そこからしばらく歩き河和小学校前を通り、１５分ほどで全忠寺に到着します。

立派な山門

本堂の破風

ここでガイドさんが最初に説明してくれたのは、お寺の名前の由来でした。河和城初代城主戸田憲光の戒名からつけられたもので、正式には『信渓山全忠寺』です。元々は旧跡さんの場所にありましたが、元和年間(1615～1624)に河和水野家により現在地に移され、水野家の菩提寺として建てられました。幕末から明治の初めにかけて、今の本堂その他の建物が建てられ、旧河和町曹洞宗の中心になったといいます。以前はユースホステルとしてこの辺りを旅する若者に多く利用されており、私もその名前は憶えています。

曹洞宗のお寺さんで山門の２階には高欄がめぐらされているなど、東浦の乾坤院のものにとても似ています。しかし、本堂の玄関?には立派な破風があって、屋根中央の瓦には竜の上に琵琶のような楽器を手にした天女が彫られています。この彫刻は上野間の立川流彫刻師「中野甚右ヱ門」の作です。その下の木にもなかなか立派な彫刻が施されています。このような立派な飾りや彫刻は東浦ではお目にかかりません。

たくさんの墓石が並ぶ水野家のお墓

山門をくぐった左手奥にかなり大きな阿育王塔があります、見慣れている石浜の明徳寺の物よりかなり大きいです。本堂前でお参りしてから裏手にある墓地へ向かいました、そこ

は本堂の屋根よりも高くなった崖の上にありました。本堂や庫裏の屋根が入り組む様を見ることはまずありませんが、遠くに海も望める景色は瓦の黒さが銀色に光り、とても美しいと思いました。

全忠寺の檀家は 300 軒ほどという説明でしたが、かなり広い墓地でした。その一番奥に水野家のお墓はありました。高さが 150cm 程で先端が三角形になった墓石が 15～20 基が 2 列にならび、その列の前中央には五輪の塔が 2 基あります。さらにその横にはとても小さな五輪の塔が 7 基ありました。

河和城主は戸田氏の子孫が

「水野を名乗った」

河和城の階段で説明してくれた時は、河和水野の成り立ちがはっきりと理解できていませんでした。帰ってから調べてみて分かりました。私の理解は以下のようなものです。

① 戸田宗光は明応年間(1492～1500)三河と南知多に進出。子の憲光は勢力を拡大し伊勢湾口を支配し、河和に移り「河和殿」と呼ばれた。
② 河和城主は繁光、守光と継がれる。その間に緒川の水野氏が南下して攻防が続いた、が、水野信元が謀殺された後に和睦がなり、信元の娘「妙」が守光に嫁ぐ。
③ 河和の里は平和になった。
④ 天正 18 年(1590)守光は、小田原攻めで討ち死に。河和城内は大混乱に。
⑤ 妙は幼児 3 人を連れて城を脱出。戸田家の再興を願い於大の方を頼って直訴する。8 年後に子の満千代は元服し、家康の一字を賜り光康を名乗り姓も水野に改める。
⑥ 家康に旧領復活を直訴する。慶長 6 年(1601)河和郷 1460 石を賜り、復帰が叶う。
⑦ 領内は喜びに沸き、尼となった妙は守光の墓に詣でた。そして、小雨の降る夜になると提灯をともしたような灯が城山につづいた…と長老がつぶやいたという。
⑧ その後光康は屋敷を築き、子々孫々まで地頭として明治まで続いた。